

# 背景：現代の家と情報

政策・メディア研究科 修士二年 80331768

児玉 哲彦

## 本研究のポイント

高度化する情報技術が生活へ入り込んでいくことは、生活者と情報との関わり方、特に家族やコミュニティの有り様を変えていく。ここでは本研究の背景として、それを分析する。

具体的な主題としては

- 1.蓄積されていく情報の活用の困難
- 2.情報の経路の個別化による家族の分断
- 3.意識資源の集中による生活の連続性の分断

について論じる。

### 1.蓄積されていく情報の活用の困難

まず、ユビキタス環境における多様な入力系により、必ずしも人間が意識しなくともコンピュータの扱うコンテンツは増大していく。ある 70 代の女性は、デジタルカメラを使用しはじめてから一年間で 373 枚の画像を撮影した。筆者も個人のウェブログを開始してから半年間で 162 件のエントリーを作成した。個人の PC に 10 万件単位のファイルがあることは珍しくなくなっている。

では、家の中で蓄積されていく情報とはいかなるものであろうか。D.ノーマンが「エモーショナルデザイン」[1]の中で提唱したように、生活の中で蓄積されていく情報は無味乾燥ではなく、関わった人間の感情に影響を及ぼす「記憶」である。ここでいう記憶の定義は、実世界／メディアの双方に蓄えられた外在化された情報をもとに、想起する一回性のものである。

関連する研究としては、野島らによって同様のコンセプトが「思い出工学」[2]として提唱されている。また、美崎らはこれまでの人生で読んだ本、書いた日記、撮った写真等を丸ごとアーカイブしハイパーリンク化されたデータベースを構築する「記憶する住宅」[3]プロジェクトに取り組んでいる。現

在蓄積された資料の半分程度がデジタル化され、項目数は 70 万件を超えている。我々が対象とすべき情報の項目数が明らかにされている。またここでも情報を蓄えるだけでなく、それをいかに楽しむなど活用するかに焦点が当たっている。



図1 美崎薫「記憶する住宅」

こうした状況においては、情報があまりに膨大になり、活用するための時間を取ることが難しくなる。解決策としては、人間の能動性を必要としないコンピュータによる自動化された提示が必要であり、情報をその作られた文脈に応じた適切なタイミングで提示することが望ましい。

### 2.情報の経路の個別化による家族の分断

生活の情報化は家族やコミュニティといった社会関係にどのような影響を及ぼすだろうか。それは、地縁や血縁といった既存のコミュニティを解体する力として働くと考えられる。人類学者梅棹忠夫は、「家の中を認知科学する」[4]において「妻不要論」を展開した。また岡田斗司夫は「フロン」[5]において核家族の限界を指摘した。

例えばコンビニや清掃サービスなどを通じた家事の外部化。女性の社会進出。一人一台のテレビや携帯電話による、情報の入出力経路のパーソナル化。

ソーシャルネット等のネットワークを通じた多様なコミュニティへの帰属。さらに、情報の氾濫や透明性の増加は既存の権威や統一された価値観を解体する。特に新しいテクノロジーに関しては若年層の方が理解力がある。

これらは結果的に、家族の成員の間での相互理解の困難を生み出す。それぞれが異なる年代／コミュニティに所属し、生活も離れて暮らしていたり時間帯がずれていたりする。各々の興味も異なり、技術への理解にもギャップがある。結果的に、お互いのしていることを知ったり、感じていることを共有する機会が乏しくなる。

こうした問題を解消するために、一つには上で述べた蓄積されたお互いの行動履歴を交換し、時空間のギャップを埋めて相互理解を深めることができる。また、インタフェースデザインの観点からは、これまでの家の中の行為を観察し、コンピュータへの入力として用いる継承的デザインの考え方により、家族間での技術への理解のギャップを埋めることが有効であると考えられる。

### 3.意識資源の集中による生活の連続性の分析

最後に、既存の情報機器のデザインが多くの場合新たな使い方を覚えねばならず、また利用者の能動性を必要とする物であることを指摘しておきたい。氾濫するのは情報だけではなく、そのインタフェースとしての機器も増えてきている。PC、テレビ、ビデオレコーダー、コンポ、携帯電話、携帯音楽プレーヤ、デジタルカメラ等、挙げていけばきりがない。これらの新しい機器の使い方を覚えて使いこなす時間を生活の中に新たに設けることは難しい。

行為の観察や継承的デザイン、受動的提示などの方法論は、結果的に意識資源を必要としない操作を実現し、意識して情報を活用しようとしたりそのための時間を取らなくても、知らず知らずのうちの情報が活用されているという状態を作り出す。

### まとめ：ユビキタス環境の研究としての位置付け

ユビキタス環境の研究の多くは、物品のトレーサビリティや遠隔地とのコミュニケーション、空調

の調節等に代表されるように、利便性や快適性を目的としている。

本研究において特徴的なのは、上で述べたようなエモーショナルな記憶というものに着目し、それを個人の愉しみとする、交換するなどの活用方法を提案することである。

そのために能動性や意識の集中を必要とせず、これまでの家の中の行為やマナーに従って無理なく使えるインタフェースデザインの手法を提案した。

また、時空間を超えたお互いへの情報の経路を構築し、上記のようなデザイン手法により技術への理解に関するギャップを埋め、家族の相互理解を促すことを目指した。

### 参考文献

- [1] ドナルド・A. ノーマン (著), 岡本明, 伊賀聡一郎, 安村通見, 上野晶子(訳), エモーショナルデザイン—微笑を誘うモノたちのために, 新曜社, 2004.
- [2] 山下清美, 野島久雄, 思い出コミュニケーションのための電子ミニアルバム の提案, ヒューマンインタフェースシンポジウム 2001, 2001.
- [3] 美崎薫, 河野恭之, 「記憶する住宅」～55 万枚のデジタルスキャン画像の常時スライドショー・ブラウジングによる過去記憶の甦りの実際, インタラクション 2004, pp.129-136, 2004.
- [4] 野島久雄, 原田悦子(編), <家の中>を認知科学する 変わる家族・モノ・学び・技術, 新曜社, 2004.
- [5] 岡田斗司夫, フロン—結婚生活・19 の絶対法則, 海拓社, 2001.